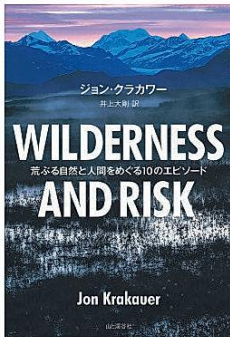


# 私の本棚

▶「WILDERNESS AND RISK 荒ぶる自然と人間をめぐる10のエピソード」(ジョン・クラカワー著、山と溪谷社)

登山家でもある著者は1996年の長編ノンフィクション「荒野へ」がベストセラーとなった後も、一貫して自然と人間との関わりをテーマとしてきた。本書は、その著者がほぼ無名時代に



アクサ生命保険社長

安舘 聖司氏

様々な雑誌で執筆した記事を中心に、近年のエッセーも加えて10篇を収録した一冊だ。

自然の容赦のなさが時に人命を危険にさらすが、ある種の人々は挑戦を止められないというテーマでは、ビッグウエーブ・サーフィンと未踏の山頂に挑み続ける登山家を取りあげられている。また、危険を矮小化し、自然を商業化した結果、エヴェレスト登山のシェルパの危険度が大きく上がっている事情が紹介される。これは著者が追い、警告し続けているテーマだ。

本書の白眉は「愛が彼らを殺した」。1990年代に米国で大流行した、素行不良の青少年を大自然の厳しさの中で立ち直らせる「荒野療法プログラム」を取りあげた。金儲け主義とする団体の組織的な暴行の結果、落命した若者を描いた力作だ。

重要なテーマを中心に著者のエッセンスが詰まった、貴重な1冊になっている。